

### 又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」論：占領時空間の暴力をめぐって

柳井，貴士

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2016-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012792>

# 又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」論

—占領時空間の暴力をめぐる—

柳井貴士

## 1 はじめに

又吉栄喜の「ジョージが射殺した猪」は一九七八年、第八回九州芸術祭文学賞を受賞した<sup>1</sup>。本作品で又吉は、沖縄の現実の側面を描くために、米兵の視点を用いている。作品の中心人物は若い米兵ジョージである。沖縄の基地の街を舞台に、〈ペイ・デー〉の直前、金銭的に困窮する米兵の集団に、ジョージはいた。彼は仲間との間に差異の感覚を抱きながら、またその小集団における自己の立ち位置を模索しながら、いわば差異と同一性の確保に揺らいだ存在として描かれる。沖縄に根付く人々と基地の問題を描いた作品に、例えば長堂英吉「黒人街」<sup>2</sup>があるが、ここでは基地の街における白人と黒人の抗争を軸に「大東亜戦争」を生き抜いた女性の、アメリカ占領下沖縄における現実の困難さが

主に描かれていた。又吉の「ジョージが射殺した猪」は米兵の視点に立ち、その内面を掘り下げると  
いう意味でそれまでの沖縄の文学作品とは一線を画す。<sup>3</sup>

又吉は「ジョージが射殺した猪」において、ベトナム戦争期を作品内時間として設定している。アメリカでは一九五一年に一般的軍事訓練徴兵法、一九六七年に軍事選抜徴兵法が制定されたが、一九七三年に徴兵制は廃止されている。新兵のジョージは、この時代の米兵の多くがそうであつたように徴兵により自分の意志の埒外において戦争主体者としての位相を与えられた存在である。

戦後の沖縄文学は、アメリカ人（兵）との関係を抜きにしては語れない。米国統治下にあつた沖縄が一九四八年の朝鮮半島分断国家成立、翌年の中華人民共和国の成立という極東の緊張状態から、その重要性が高まつたのは周知の通りである。冷戦構造の枠内において米国統治下沖縄は前景的役割を担い、そのため基地の整備が、近隣住民の経済と密接に関わる状況も生成される。文学においても「アメリカ（人・兵）は表現の上での主要な題材として登場することにな」<sup>4</sup>るのだ。

本作品に関しては、秋山駿が「視点のユニークさと、文章の鮮かさ」<sup>5</sup>を指摘し、岡本恵徳が「この作品は、いわばそういう状況下の沖縄を舞台に、ベトナム戦争の激しくなる中で前途に希望も持てず、そのうえ身体的なコンプレックスを抱く米国の下級兵士を主人公に設定することによって、普遍的な主題を作品化した」<sup>6</sup>と述べる。また浦田義和は「兵隊の中ではむしろ善良な米兵の異常を描いている」<sup>7</sup>と述べ、ベトナム戦争に対して勇猛に振る舞いきれない、米兵の心性をとらえる。マイク・モラスキー

は一九七八年という時点でのベトナム戦争からの撤退を踏まえ、「ジョージが射殺した猪」は、手の届かない無敵の占領者、というステロタイプなイメージを瓦解させ、米国に対する新たな自信ある態度<sup>(8)</sup>が示されていると解した。

又吉栄喜は「僕の原体験には、軍作業員やAサインバーのホステス、基地のメイド、そういった人々を含めての「米軍的世界」が原風景として定着している」と述べるが、「ジョージが射殺した猪」以前にも「カーニバル闘牛大会」<sup>(9)</sup>、同時期の「パラシュート兵のプレゼント」<sup>(10)</sup>といった作品に米兵を登場させている。前者では、闘牛会場に車でやってきた〈チビ外人〉の車の傷をめぐって対峙する沖縄ネイティブとの間の緊張を描いているが、その〈チビ外人〉に立ち向かえない同郷の大人への違和感を、語り手の少年は示している。また後者では、偶然に知り合ったパラシュート兵との交流から心が打ち解けたと思った刹那、自分たちの大切な〈泉〉の場所を教えたいと思う語り手は友人にきつく拒否される。そこには表層と深層の〈交流〉の断絶が見てとれる。初期の又吉作品では、米軍への単純な告発に終始しない、内部への違和感や多様な関係性がテクストに見てとれるのである。

「ジョージが射殺した猪」の主人公、白人兵のジョージは、仲間たちと基地の街で酒を飲み、女を買い、その交渉の失敗から街を彷徨するうちに、黒人のテリトリーに侵入し暴力を受ける。その後、基地に戻り、ある昂揚感から基地の外でスクラップ拾いをする老人を、〈猪と間違えた〉という理由を企て射殺する。

本論では、テキストにおける〈時間〉と〈空間〉について考察する。また主人公ジョージの位相を分析しながら、彼の同一性に対する不安、進行するベトナム戦争と沖縄という基地の島の構造までを射程し分析していく。

## 2 テキスト内の「占領」——モデル事件を通して

岡本恵徳は、一九六〇年十二月九日、三和村で米人ハンターが獲物と間違えて老人を射殺した事件を挙げ、又吉が本作のヒントとしたと推測している。<sup>14</sup>だがテキストに採用された事件のヒントはこれだけではないだろう。より直接的には一九五九年十二月二十六日、金武村のキャンプ・ハンセンで弾拾い中の農婦が米兵に〈イノシシと間違えて〉射殺された事件、一九六一年二月一日にも伊江島米軍射撃演習場内で弾拾いをしていた男性が射殺される事件が起こる。基地周辺での葉莢類拾いの最中の射殺事件はこの時期に多発している。また日本復帰後の一九七二年九月二十日にも、金武村のキャンプ・ハンセンで軍雇用員の男性が米兵にライフルで射殺される事件が起こる。<sup>15</sup>テキストの発表された一九七八年から過去の事件のいくつかの事件を参考にし、それら占領の諸相を示す一方的な暴力の行使の総体として、「ジョージが射殺した猪」では、主人公ジョージにより老人が射殺されるという事件を扱う。つまり又吉はある一点の時間を物語内に持ち込むのではなく、長く続く米軍占領下の沖縄

の〈時間〉を採用することで、出来事を拡張し、また継続される占領の様相を示しているのである。

九州芸術祭文学賞を受賞したテクストは、『九州芸術祭文学賞作品集1977〔8〕』に掲載された。この初出版と『文學界』版は、『ギンネム屋敷』所収のものと差異が見受けられる。大きな違いは、ジョージが老人の射殺を自分自身に納得させるため用いる、他の米兵による悲惨な事件である。初出版、『文學界』版には「つい最近、〈太陽光線が反射して信号灯も歩行者もみえなかった〉といい通しただけで、事実、青で横断歩道を渡っていたらしい中学生を轢殺しながら無罪になった事件もあるのだ（一八頁／一四四頁）」とジョージに述べられた事件は、一九六三年二月二十八日の那覇市一号線における下校途中の男子中学生の轢死事件を指しているだろう。この事件では運転した米兵が軍事裁判で無罪となり全体的な抗議運動が起こっている。しかし、この箇所は『ギンネム屋敷』所収の「ジョージが射殺した猪」からは削除されている。理由は詳らかではないが、削除によってジョージの内面へより焦点が当てられることになる一方で、初出版、『文學界』版では作者が、沖縄での米軍の無法な振る舞いを、〈時間〉を拡張しながら描き込んでいる点がかげがえる。

本作品で基地の街としてイメージされるのは〈コザ〉である。マイケル・モラスキーはコザについて次のように述べる。<sup>16</sup>

コザが私生児のように考えられている背景には、この街が元々占領下にあり混成語的な名を持つ

という他にも、近隣の軍事基地と密接なつながりを持っている事が挙げられる。ここでの「密接さ」は経済的な意味とエロティックな意味の両面から理解される必要がある。というのも、この二つの意味領域の融合した基盤の上にコザのアメリカ人占領者との複雑な関係が成り立っているからだ。

つまり〈コザ〉とは経済基盤としての基地と、性をめぐる暴力につながる基地という二つの領域の融合した存在なのである。宮里政玄は沖縄の占領と米国の軍政について以下のようにまとめている。<sup>17)</sup>

海軍が沖縄の軍政の責任を引き受けたのは、沖縄が基地に適していると考えたからであった。しかし日本の降伏によって陸軍の基地計画が縮小され、同時に沖縄の海軍施設を開発するという理由もなくなった。(中略)それで海軍は沖縄に対する関心を失い、一九四六年七月一日に沖縄の軍政を再び陸軍に引き渡したのである。それ以後一九七二年の日本復帰まで、陸軍が沖縄を統治の責任を負うことになる。

軍政による沖縄の戦争の傷跡からの復興は極東地域における冷戦への関心とも密接にかかわる。鹿野政直は「沖縄の「近代化」政策は、その「要塞化」政策と表裏一体の関係で進行する」と指摘する。<sup>18)</sup>

基地の重要性が島の要塞化を促し、また朝鮮戦争やベトナム戦争へ米軍の関与により、基地の街は拡大していった。「一九五六年七月一日、コザ村は市に昇格して同日から市制が施行された。政府では市昇格の条件として、人口や商業地域の数、面積などを基準にしていた。当時のコザの人口は、臨時調査の結果、政府条件の三万人を突破していた。商業地域も条件すれすれで認められた<sup>19)</sup>」という状況から人口、商業施設の拡張が認められる。

「基地」は政治的に経済的にいろいろの問題を惹起せしめ基地の存在が今日の沖縄を変態的、特異な政治機構の中で呻吟せしめている。その反面、経済的に基地収入となって住民生活をうるおしていることも否定できない事実である。このことから好むと好まざるとにかかわらず、軍人属客とする業界は多い。Aサイン業界もその一つである。／この業界に嵐となり黒い施風となって吹きまくるものにオフ・リミッツがある。<sup>20)</sup>

住民と米軍基地との関係の多様性は生活を媒介として複雑に絡み合う。片方の退去が片方の生活を圧迫するため、基地の街での米兵の犯罪は、一方的な裁断の場合から後退する場合もある。「ジョージが射殺した猪」における、米兵の際限ない暴力の発動に対して、無力でしかないホステスたちは次のように描かれる。

ワシントンがジャックナイフをとりだした。少しあいている女の胸もとに入れ、胸部にかけて切り裂いた。女は暴れた。死にもの狂いにみえた。ジャックナイフは女の皮膚に触れ、血がドレスにじみ出た。(二頁)

ジョンはあごをあげ、苦しがつたが、目の上の女の顔をギョロリとみ、右こぶしを握り、スピード豊かに女のあごに突きあげた。ガクツと変な大きい音がした。女は無言のままフロアに崩れた。(二頁)

米兵相手の「Aサインバー」は共犯的に存在するしかない。ジョージは次のように回想する。「一月前にやはりジョンたちが暴れた。俺はやはり何もしなかった。数日後、女たちはその夜の事件を忘れ、ジョンたちにこび、ついていったんだ。俺はよく憶えていたのに。ばかな女たちなんだ。どうしようもないんだ(三頁)」。オフ・リミッツによる立入禁止やAサインの取り消しによる経済的打撃が、暴力の主体と客体を一層際立たせている点は見逃せない。この〈空間〉は占領地域のそれであり、無法的な暴力が介在することの恐れと、それでも生活の確保のために働くホステスとの関係性の断面を記している。

テキストは〈空間〉の暴力性と、〈時間〉の拡張による犯罪の継続性を描きながら、占領の実相に触れようとしているといえるだろう。

### 3 同一性の困難——ジョージの位相の分析

早く帰りたいとジョージは思った。宿舎でエミリーに手紙を書きたい。しかし、どうしてもジョンたちには言えない。馬鹿にされるのは目にみえている。(七頁)

かんにん袋の緒が切れそうだ。さっぱりしたい。ベトナムの実戦に参加するか、エミリーのところに戻るか、はつきりさせたい。毎日わけがわからなかった。(八頁)

なによ、十ドルぐらいと女が言った。ホステスなかまはみんな、あんたはけちな新兵だと言ってるのよ、いつベトナムで死ぬかもしれないのに金をためてるんだってさ。ジョージはむかむかしだした。俺は国にエミリーがいるんだ、お前らに何がわかるもんか。(九頁)

ジョージの内面は同一性への不安や嫌悪感に満ちている。彼はその心性の空白をエミリーというガールフレンドを志向することで埋めようとする。沖繩において不在のエミリーは、外部との折衝による疲労と陥穽を修復する装置であるはずだが、「ワシントンに金をわたし、宿舎のベットにはらばいになり、エミリーに手紙を書こうとジョージは何度も思った」とあるように、例えば手紙を書くという行為自体は留保され、自身がエミリーから周縁化されることを導くが、ジョージは不在の中心点を志向するしかない。

ベトナムで手柄をたてたと書けばきつとエミリーは返事をよこす、まちがいない。俺が出世しないのでエミリーはあいそをつかしているのだ。そうでなければエミリーから手紙のこないわけがわからない。俺が手紙を送ってから六十七日にもなる。(八頁)

六十七日という正確な日数の換算は、空白の時間としてジョージが過ごした時間を言いあらわしている。加算の正確性は空白の深度化なのである。相互作用として協働しない「手紙」の一方通行性は、ジョージの孤独な側面を強調するが、その(いまのところ)接点を持ち得ないエミリーとの空白は、別の衝動によって埋められなければならない。

〈孤独な米兵〉として刻印されるジョージは自らの主体性の瑕を、沖縄の女性の階層化において保持する。ホステスへの仲間の暴力の場面でも、「すべてのホステスがジョンたちを囲んで何かわめいている。嘆願しているようでもある。怒っているようでもある。悲しんでいるようでもある。ジョージはよく知らない(二頁)」と語られる。ジョージは出来事に関与も関心も示さない。否認の対象となる沖縄、ホステスはジョージの中で明らかに下位に配置されている(それは、「劣等民族のくせにばかにする気か！(二頁)」と口走るジョンや他の米兵の心性でもある)。

ジョージは仲間との間に差異を感じ、またなぜベトナム戦争へ向かうのかという問いに苦しむ。そこで自分の立場を仲間たちに印象付けるため、沖縄の女を買うという手段が選ばれる。しかしジョー

ジは値段の交渉に失敗し、下位に階層化した沖縄の女性から反撃される。

こんな女になめられてはならない。はじめ十ドルでオールナイトと二人は約束したんだろう。でもり気味に言った。女は英語でききかえした。ジョージより英語が流暢だ。ジョージは緊張した。  
(九頁)。

言語の流暢さにジョージは圧倒される。英語は自分たち米兵のものであり、沖縄と線引きする手段でもあったが、ここではその英語を仲介にして、自分の立場の強固さが流動的なものとなる。「弱虫、あなたは戦争が恐いんだ、エミリーとか馬とか、まだ子供なんだね(九頁)」という娼婦の言葉は、ジョージの同一性の困難を言い当てているのである。ベトナム戦争という巨大な暴力に向き合うジョージは、また暴力によって自身を位置付けようと以下のように試みる。

厚化粧の下の顔も血色がなく、皮膚がたるみ、かさかさになっていくはずだ。米国人がそんな女をもて遊んでいる。ジョージは胸がむかついた。早く強姦してしまえ。すめば、俺がピストルで射ち殺してやる。(二頁)

ワシントンの自慢のあの口髭を皮ごとジャックナイフではぎとりたい。ホステスたちを一人残ら

ず射殺したい。胸くそが悪い。ピストルを持っていない。残念だ。もちあるくべきだ。(三頁)

俺は万に一つも敗ける恐れのない無力な婦女子にさえ何もできないのか。俺が引き金を引けばみんな俺に一目おくだ、ジョンも上官も黒人たちも女たちも……。 (一四頁)

空想された暴力の発現において自己実現を志向するジョージがここらみてとれるだろう。

また「ジョージが射殺した猪」では白人と黒人の対立構造が重要なモチーフとして描かれている。先に触れた長堂英吉「黒人街」でもその対立は描かれてはいたが、主眼は(うめ)という女性の生き方に置かれていた。本作では、ジョージが街の彷徨の果てに(黒人街)へ侵入してしまう。<sup>21)</sup>ここにはアメリカ国内に存在する人種差別、人種間の抗争が流入されているといえる。ベトナム戦争への困惑や不安から当時、凶悪犯罪が続発していた。本土でも、例えば『アカハタ』が「基地沖繩／米兵の凶悪犯罪激増／民家へ放火、催涙弾／ベトナム派遣でやけくそ」と報じている。<sup>22)</sup>また「恐怖の町コザ 沖繩米兵の犯罪続発」として「コザ市で、三日、米兵同士のけんかに巻き込まれた沖繩のキャバレー経営者が刺され死亡した」(『朝日新聞』東京版、一九六六・一一)との記事や「米兵との対立目立つ 沖繩相次ぐ乱暴、怒る住民」(『朝日新聞』東京版、一九七〇・六・一六)といった記事が散見される。一九七〇年はとくに米兵犯罪記事が目立ち、住民巻き添えの状況と犯罪検挙率の低さが「コザ市で 米兵犯罪の巢／沖繩 73年5月」で報告されている(『朝日新聞』東京版、一九七三・五・一九)。

暴力、犯罪が占領地域支配者のそれであったところから、ベトナム派兵による焦燥や苛立ちへの暴力へと色合いを変化させていると、件の記事は伝えたいようだが、一方で、暴力そのものは沖繩に存在しつづける点を見逃してはならない。問題はその暴力の多様性であり、「ジョージが射殺した猪」では、人種差別、人種間抗争の問題を含みながら、「占領者／被占領者」だけでなく、「占領者／占領者」の関係における暴力が問われているのである。

「気がついたらやけに黒人が多い。ギョロギョロした摔猛な大きい目。ネオンの色を映し病的ににごる黒い顔。ぶあつい唇をひらききって笑っている。白い大きい歯並び。俺はとんでもないところにまよい込んだようだ。ジョージはほろ酔いもさめた（一一頁）」、「女どころじゃないとジョージはほんやり思った。ピストルを常携すべきだ。もち歩くのは少なくないの、今回は運が悪い。だが、この黒人たちは十数発射ち込んでも、なお歯や目をむき出して俺におそいかかってくる（一一頁）」。「ここでは、自分たちとは異質の存在として黒人を（見る）ジョージがいる。この後、無理やり店に引きずりこまれたジョージは黒人たちの暴力の対象になる。」

そのとき、ジョージは暴力から文字通り目をそらす。目を開かないことで出来事をやり過ぎそうとしていくようでもある。暴力の主体から客体へと位相を変えたとき、ジョージは以下のように否認するのである。

黒人は髪を引っぱり、ジョージの顎をあげるが、ジョージは目をあけない。すると、腰と腹に足げりがきた。先のとがった、でかい革靴のようだ。思わず、顔をしかめたがジョージは目を固くつぶる。何度もけられた。鈍痛が消えない。黒ん坊め、おぼえているよ。ジョージは内心叫んだ。くやしさがこみあげた。しかし、体がしびれ、実際酔いつぶれているのと変わらない。借りは必ずかえすからな、一人残らず顔をはつきりおぼえているぞ。しかし、やはりジョージは目をあけない。(一二)

やがて、黒人男たちはジョージの服のポケットをあさり、ありつただけのドルを掠奪した。ジョージは目をあけなかった。(中略)とうとう一人が笑いながらジョージの顔に小便をかけた。アルコールやら精液やらけもの体臭やらが混じった臭い。たしかに噴出している勢いのある重み。なまあたたかいヌルヌルするような感触。吐き気が急に強まった。こらえた。目をあけなかった。(一四)

だが一方で、以下のように「ジョージの目はみひら」くのである。

何人かの黒人がジョージの肩や腹や足をおさえ込み、一人か二人でジョージのバンドをはずし、ズボンをおろしかかった。ジョージは目をかっとなげ、何かわめき、ののしり、必死に抵抗し

たが、身動きはほとんどできない。下着がおろされた。異和感を下腹部に感じた。黒人たちはおさえ込んだまま、大声で誰かと呼んだ。三人の黒人女が自分を見おろして立っているのをジョージはみた。今までどこにいたのだ。黒人女たちはわなにかかった、かもしかのように飛びはねている。ジョージの目がみひらいた。(二三)

ここでは暴力の質が違う。彼の抵抗は去勢への恐怖として現れているのである。ペニスや肛門への暴力の可能性が意識され、それに対するときジョージは唯一抵抗を試みるのである。境界線外に存在する黒人の性的な越境への恐怖は、自己同一性の不安を更に煽りたてるのだが、異人種による性的な暴力は、それまでの主体者＝白人、客体者＝沖繩人という構造を覆し、暴力客体としてのジョージ／白人という位相を示す。

つまりジョージは強者としての〈白人〉でありながら、言語的劣等感により、下層であるはずの沖繩女性から駆逐され、またエミリーの不在の期間が不安の要因となる。そしてアメリカにおける人種間抗争の構図が沖繩に導入されながら、ジョージは被害者となり同一性の揺らぎに苦しめられるのであった。

#### 4 戦時性〈暴力〉——ベトナム／沖縄

ジョージはあるときから〈音〉に神経質になる。

耳をつんざき、耳の底からわいてくるあの無数のジェット戦闘機のエンジン調整音は一晚中、每晚限りなく続く。宿舎は強力な防音装置をほどこしてあるがジョージは耳鳴りのような音をやすみなく感じ、ねむれない。その金属音は同じ調子で、低くも高くもならず、波もなく、シーンとまるで永遠に響くように果しないのだ。睡眠薬の量は日増しに増える。不眠は苦しかった。二、三カ月前まではエミリーの楽しい思い出に浸り、長い夜も苦にならなかつたのに。宿舎を一步出たら、その音はどこまでもジョージについてまわる。(一四頁)

耳鳴りにジョージは気づく。今夜はほんとに珍らしくジェットエンジンの調整音がない。と、すると、この耳の底からキーンと連続してやまない金属音は何だ。虫の声か、しかし、ここは石も雑草も土もないアスファルトの広大な平面だ。金網の向う側の虫か、それにしては近くに聞えずがる。(一七頁)

ここでの〈音〉は外部の不安の象徴として現れている。ジェット戦闘機はベトナム戦争の介入を示唆

し、巨大な暴力へ動員されるジョージの困惑が〈音〉として自身を苦しめていく。ジョージは主体的に戦争を選択して沖繩にいたのではなく、「俺はこれっぽちもその気もないのに（八頁）」着任したのだと思っている。自己の同一性に対する深刻な不安、不可避に進行する戦争への忌避の感覚が〈音〉として彼にどこまでもついてまわるのである。

ジョージは、基地の周辺で発見した老人に敵意を向ける。その要素となるのが老人の〈眼差し〉だった。ここでは視覚を通して〈見る〉主体であらねばならない占領者の、〈見られる〉ことへの極度な苛立ちがみてとれる。つまり、〈見る〉という行為は一方的なものであるべきで、そこには見返されるという事態は想定されていない。パナプティコン的な権力構造が一方方向の〈見る〉関係に内在しているのに対し、ジョージは老人の〈眼差し〉を発見することで、安定的な権力関係から逸脱した存在となっている。

恐怖、憎悪、あつとジョージは今、気づいた。敵の目だ。黒く貪婪な目、恐怖と憎悪にみひらいている目、ベトナム人の目。皮膚の色、体かっこう、ゲリラ。俺の敵はあのような人間なんだ。ジョージはふいに身ぶるいした。（二五頁）

敗残の沖繩人のくせに。あの目はなんだ。強がって。あの老人はじつとしておれば殺されないと信じているのだろうか。ジョージは歩きながら考えた。（二五頁）

老人を射殺することがジョージの頭に浮かぶ。それが一連の不安の解消になるとジョージは思うのである。

運さ。ジョージは歩き続けた。俺は何もあの金網の外側を注意していたわけじゃない。なのに、なぜ、あのような日暮れ色にまぎれる濃緑色のくすんだ古い服の、しかも小柄の老人を発見したのだ。老人は発見されたのだ、殺人者の俺に。運としかいいようがない。ベトナムも同じなんだ。俺たちがどのようにしたばたもがいたってどうしようもないことさ。(一六頁)

戦時下のベトナムと、基地の沖縄がここでは同定される。老人の射殺は戦時性の暴力と同意であり、それだけに米兵が沖縄をどのように感知しているかをテキストは示しているといえる。またベトナム沖繩という構造下における暴力、下位に置かれた沖縄への暴力の肯定が、ジョージの自己実現の一助となっている点に注意しなければならない。「沖縄人もジョンもジェイムズも誰もみさげる権利はない。許さんぞ。俺を無能あつかいする誰も。俺は他者の生死を左右する力がある。俺のこの指に他者と他者を取りまく数多くの他者の運命がゆだねられている、まちがないんだ(一六頁)」と考えるジョージの全能感は、そう肯定することで同一性の不安からの解消へと導くだろう。強い白人、強い米兵、強い自分という幾重もの実像の実現が、無抵抗の老人の射殺という暴力に焦点化される。し

かし当然、ジョージは〈強い〉存在にはほど遠い。ピストルに頼り、無抵抗の老人を撃つことでの自己実現とは空疎なものでしかない。だがそもそも戦争という巨大な暴力が引き起こす事態とは武器の使用と、あるいは空爆に象徴される無抵抗な人々の殺害でもあった。繰り返すが、ここではまだ見ぬ〈戦場／ベトナム〉と〈沖縄〉はジョージの中で同位のものである。統治地域と戦場を同じ地平に捉える暴力的眼差しと、それが個の同一性の実現という極めて私的な領域からの発現である点が、米兵の視点から描かれる「ジョージが射殺した猪」を特徴づける要素といえるだろう。

ジョージの自己実現とはしかし、強い自己の生成ではない。

俺はしとめる自信はない。俺の射撃の腕前ではむつかしい。だが、俺はベストを尽す。あたりがずいぶん薄暗くなっているようにジョージは感じる。ふと、ジョージは思う。俺は抵抗も逃避もないおいほれじいさんしか殺せないのか。ベトナムとは違う。いや、あれは猪だ。(一七頁)

無抵抗の老人を撃つこと、それは戦場となるベトナムでの〈殺人〉の予行的行動である。だが、ジョージは老人を人間として撃てない。〈猪〉に置換することで、人を撃つという重大な行為から逃避する。あるいは米兵の特権的地位により殺人罪からの逃避も予想される。ジョージは自分の責任において出来事を引き受けないし、そのような立場の示す暴力性には気付かないだろう。

取り調べはうけるだろう。どう弁解すべきか。猪とまちがえた？ 時間を少し遅くずらし、暗すぎ視力が減退していたとする？ それとも基地内から金網をこえて外に逃げた、俺は空に二発威嚇射撃した、それでも逃げた、俺はやむなく撃つた？ これは確実ではある。(中略) 果して、このようなめんどくさいいいわけを考える必要があるのか。取り調べ官はどうせ、よくは調べないのだ。(一八頁)

ここには〈占領〉の〈時間〉性、〈空間〉性があらわれている。加害者が保護され被害者が救われなという状況は「取り調べ官はどうせ、よく調べない」ことからもうかがえる。階層化され、下位に置かれた沖繩の暴力はこのようにところに潜んでいる。ジョージは強い存在にはなれなかった。それは沖繩という米軍統治下、〈占領〉地域での一方的な力の誇示でしかなく、ベトナムという四方に敵が潜む戦場とは別のものなのだ。しかし、彼は両地域を同位に捉え、老人の射殺に踏み切った。

いくら歩き続けてもジョージは疲れを感じない。草むらを遠く離れたが虫の声らしきものはジョージの耳で異常に高まる。(一八頁)

〈音〉はジョージの耳から離れることは遂になかったのである。

## 5 おわりに

本作では一人称と三人称を交えてジョージという米兵の心理がとらえられていた。米兵の心理が日本語という制度で示された点を新城郁夫は評価するが、本作にはノイズとしての沖繩言葉が描出された。「マスターらしき者の大声が聞こえた。ジョージはふり向かなかつた。ののしられている気がする。沖繩方言らしい（四頁）」が、ジョージには認知されない。言語の問題から本作を考察する視点も重要である。

本論では、米国統治下時代のある一点を背景としているのではなく、参照された事件がまたがる幅広い〈時間〉と占領的な〈空間〉が示唆されている点を分析した。また、ベトナム戦争から米国が撤退した後書かれた本作が、弱い米兵としてのジョージを設定することで、暴力の示す意味が、一方的な強者のそれとは違う点を指摘した。ベトナムと沖繩という位相を異にする地域が、戦争により隣接し、またそこで射殺という暴力が若い米兵の自己実現とその限界を描出した点も考察の対象としてきた。

だが同時に、本作がベトナム戦争終了後の一九七八年の作品である点も見逃してはならないだろう。ベトナム戦争は、一連の戦闘行為において、決定的な勝利を勝ち取ることなく終わったアメリカの戦争でもある。テキスト内の暴力は、この焦燥と苛立ちの上に成立したという側面がある。画一的な、

暴力主体としてだけの米国兵を表象するのではなく、弱く、内面に瑕を抱える米兵を描くことは、ベトナム戦争を通過した後に起り得る文学場の現象だといえるが〔琉球新報短編小説賞〕において、比嘉秀喜が「デブのボンゴに揺られて」(一九八〇年)を書き、上原昇が「一九七〇年のギャング・エイジ」(一九八二年)を書いたのもベトナム戦後である。ここでは支配者という位相からではなく、同地平に捉えられたアメリカ人が登場する、仲程昌徳の指摘するように、そこには主体的にアメリカ兵に接していく姿をみる事ができる。<sup>24</sup> 仲程はアメリカ兵のまなざしの対象であった者が、アメリカ人を「見る」ことによる視線の逆転を「ジョージが射殺した猪」に見出すが、そこにはジョージが弱者として位置づけられる視線の力学の反映がみられるのである。施政権返還後に書かれる文学作品は、アメリカ兵(人)との関係を多様性の中にとらえ表象していく。この点は別稿にゆずりたい。

本作のタイトルが〈猪を射殺した〉(ジョージ)ではなく「ジョージが射殺した」(猪)である以上、猪が形容されていることは明らかである。米兵の心理描写を試みることで、相対的な猪⇨沖繩ネイティヴの位相が示されているのだが、それは一元的で、ステレオタイプのな米兵観からの脱却を促しながら、暴力に帰結される〈沖繩〉の現状を繰り返しあぶり出しているといえるだろう。

## 【注記】

(1) 本作品は『九州芸術祭文学賞作品集1977(8)』(九州文化協会、一九七八年二月)に掲載された(本論の

引用はこの初出版による)。次いで『文學界』(一九七八年三月)に転載された際、多少の書換えがある。また、「ギンネム屋敷」の(すばる文学賞)受賞後に刊行された『ギンネム屋敷』(集英社、一九八一年一月)に所収されている。

(2) 長堂英吉「黒人街」(『新沖縄文学』一九六六年四月、第一号)

(3) 岡本恵徳は「沖縄に駐留する下級兵士の内面を掘り下げると共に、そういう兵士の視点で沖縄の現実を描いた作品はほとんどない」と指摘する(岡本恵徳「又吉栄喜『ジョージが射殺した猪』——下級兵士の眼で捉えた沖縄」、『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研、一九九六年六月)。

(4) 岡本恵徳「沖縄戦後小説の中のアメリカ」(『戦後沖縄とアメリカ——異文化接触の五〇年』沖縄タイムス社、一九九五年十一月、二二三頁)、また仲程昌徳「アメリカのある風景——戦後小説を歩く」(『アメリカのある風景——沖縄文学の一領域』ニライ社、二〇〇八・九)においても、他の小説と比較された「アメリカ兵」の諸相についての言及がある。

(5) 秋山駿「ユニークな視点」(『文學界』一九七八年三月、一四五頁)

(6) 岡本恵徳「又吉栄喜『ジョージが射殺した猪』——下級兵士の眼で捉えた沖縄」(『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研、一九九六年六月、一七五頁)

(7) 浦田義和「解説」沖縄の現代小説 復帰——現在」(『沖縄文学全集第8巻』国書刊行会、一九九〇年八月、

三二三頁、)

(8) マイク・モラスキー／鈴木直子訳「ポスト・ベトナム時代の占領文学」(『占領の記憶／記憶の占領——戦後  
沖繩・日本とアメリカ』青土社、二〇〇六年三月、三三六頁)

(9) 他に岩淵剛が「あえて老人の視点にはたらず、主人公の意識に寄り添って描くことで、アメリカ軍兵士の葛藤と、それに翻弄される沖繩の人びとのありようを浮かびあがらせた」と指摘している(岩淵剛「又吉栄喜の沖繩」『民主文学』二〇一二年五月、一二〇頁)

(10) 又吉栄喜、山里勝己「沖繩」を描く、「沖繩」で描くー『豚の報い』をめぐってー(『けーし風』第十三号、一九九六年十二月)

(11) 又吉栄喜「カーニバル闘牛大会」(『琉球新報』一九七六年十一月／第四回「琉球新報短篇小説賞」受賞)

(12) 又吉栄喜「パラシュート兵のプレゼント」(『沖繩タイムス』一九七八年六月)

(13) 初期作品とは、例えば「窓に黒い虫が」(『文学界』一九七八年八月)、「憲兵闖入事件」(『沖繩公論』一九八一年五月、第七号)を指し、ここでも米兵が重要な役割を示している。

(14) 岡本恵徳は「一九六〇年十二月には、本島南部の三和村でハンティング中に「獲物と間違え」て農夫を射殺する事件(「ジョージが射殺した猪」はこの事件をヒントにしたものであろうか)さえ起きている(一七五頁)と述べる(岡本、前掲書)。またマイク・モラスキーも、「この物語は、当時の沖繩の読者にとって、米兵が沖繩の農民を誤って射殺した一九六〇年二月の出来事をまざまざと思い起こさせるものであった(三三六頁)」と指摘する(マイク・モラスキー／鈴木直子訳「ポスト・ベトナム時代の占領文学」)。

(15) 米兵に関する事件は『沖縄タイムス』の当時の記事を参照した。また本土では、一九五九年十二月二十七日に『毎日新聞』が「狐の米兵に撃たれる／沖縄／薬きょう拾いの婦人」と報道、また一九六〇年十二月十一日に『朝日新聞』が「誤って射殺／狩猟中の米兵」と報道しているが、沖縄で続発する米兵の事件を逐一報道することは不可能なようである。

(16) マイケル・モラスキー／田村恵理訳「文学的イメージにおける基地の街」(『ユリイカ』二〇〇一年八月、一六一頁)、本論考の参考注記でモラスキーは、『ジョージが射殺した猪』を挙げている。

(17) 宮里政玄「沖縄の軍政」(『現代思想』二〇〇三年九月、一二七頁)

(18) 鹿野政直「沖縄の戦後思想を考へる」(岩波書店、二〇一一年九月)

(19) 『沖縄風土記全集 第三巻コザ市編』(沖縄風土記刊行会、一九六八年一月)

(20) 久保義雄「Aサインの変遷」(『沖縄風土記全集 第三巻コザ市編』所収)

(21) 『コザ市史』(一九七四年二月)には、「コザ十字路から美里がわが白人の町、十字路から泡瀬に向かう方が黒人の町となって、白人街には黒人は立ち入ることができず、黒人街には白人は立ち入ることができないようになった。MPでも白人と黒人が組を作ってパトロールするというありさまで、もしも白人が黒人街にはいりこんだり、黒人が白人街にはいりこんだりすると喧嘩さわぎになった(五三一頁)」とあり、また「当時の

(一九七〇年前後——引用者)コザ市には売春地区たる「特飲街」を含む飲食店街が、コザ十字路に位置する

照屋地区と胡屋十字路に近い(ビジネス)センター通りを中心に展開しており、前者は「オールドコザ」と

呼ばれ黒人兵が利用する地区であるのに対して、後者は「ニューコザ」として白人兵が集中する地区であった。このように米軍要員によるコザ市内の飲食・風俗店利用には明確な人種的・空間的セグリゼーションが認められ、コザ市でも白人兵と黒人兵の間でしばしば摩擦が生じ（十五〜十六頁）る状況があった（『戦後沖繩における米軍統治の実態と地方政治の形勢に関する政治地理学的研究』研究代表山崎孝史（大阪市立大学大学院文学研究科地理学教室、二〇〇七年三月）。

(22) 『アカハタ』一九六五年三月三〇日

(23) 新城郁夫は「つまり、この『ジョージが射殺した猪』という小説における「日本語」は、それ自体決して自然でも必然でもない、便宜的な「言語」として非本質化されているのである」と指摘する（新城郁夫「日本語を内破する―又吉栄喜の小説における「日本語」の倒壊―」『日本東洋文化論集』二〇〇六年三月、一六〇頁）。

(24) 仲程昌徳「復帰後の文学」（『アメリカのある風景―沖繩文学の一領域』ニライ社、二〇〇八九）